

語を書くことが多い学生諸君には、ぜひ発信型の辞書も手許に置いて勉強していただきたいと思っている。

また、「辞書は一冊持っていれば事足りる」というわけではない。各辞書に一長一短があるため、できれば複数の辞書を手許においていただきたい。発信型の辞書と収集型・蓄積型の辞書双方を手許に置いていただければ言うこと無しである。

最後にもう一点。辞書は新しい版が出たら、ぜひ購入することをお勧めする。昔、辞書学の研究者が、「新版」を車のフルモデルチェンジ、「新刷」を車のマイナーチェンジにたとえていたが、誤字・脱字の訂正や若干の加筆がなされている新刷までは気を配らなくてもよいが、最新の知見がふんだんに盛り込まれており、大幅に書き直されている「新版」が出版された際は、ぜひ購入していただきたい。車はフルモデルチェンジのたびに買い替えることはとてもできないが、辞書は十分手が出る買い物であるし、十分「お釣り」が来る買い物だと思う。

(参考文献)

赤野一郎 (1996) 「語法研究と辞書とコーパス」
京都外国語大学第50回メビウス研究会口頭発表
表ハンドアウト

注 もちろん、発信型辞書も、知識を吸収する際に役立つ。語法が充実している分、その語が使われている言語環境をもとに、語法情報を駆使して、意味を割り出すこともできる。ここでは、『リーダーズ』と対比するために、『リーダーズ』にはない要素として、英語を書いたりする際の「発信型」の側面を際立たせている。

虹の覚え方、あるいは薔薇戦争

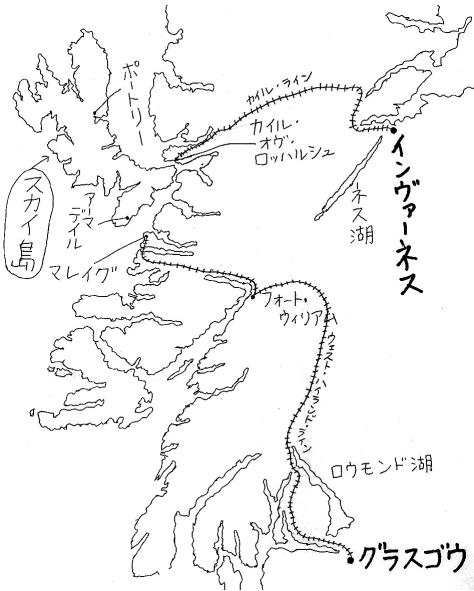
元 経営学部
安藤 聡

スコットランドには驟雨が多い。突然降り始めた雨がいくら激しく降っていても、すぐにまた止んで青空が見えたりする。だから割と頻繁に虹を見ることができる。

スコットランドの北西部はハイランド地方と呼ばれ、山岳と渓谷が繰り返し連なる風光明媚な一帯である。ここには車窓風景が美しいことで知られる長距離ローカル線が二つある。グラスゴウからロッホ (Loch: 湖)・ロウモンドの畔を駆け抜けフォート・ウィリアムを経てマレイグまで行くウェスト・ハイランド・ラインと、インヴァーネスからカイル・オヴ・ロッハルシュまでのカイル・ラインがそれだ。所要時間は前者が片道五時間半、後者が二時間半だが、これだけの時間を車中で過ごしてもまったく退屈することはなかろう。私はかつて、グラスゴウとインヴァーネスからそれぞれの線に日帰り往復乗車したので、二日間で合計十六時間を車中で過ごしたことになる。いずれの線も列車は一日に三往復程度しか走らない。

これらの線に乗ってみたいがいくら何でもそんなに長い時間汽車の座席に座っていることは出来ない、という人には、次のようなルートをお勧めしたい。すなわち、インヴァーネスからカイル・オヴ・ロッハルシュまでカイル・ラインに片道だけ乗って、カイルから海峡の橋をバスでスカイ島に渡り、ポートルーあたりで一泊して翌日アーマデルの港からフェリーでマレイグに渡って、そこからウェスト・ハイランド・ラインでグラスゴウに出るのである。このルートでもまだウェスト・ハイランド・ラインの五時間半連続乗車が耐え難いという人には、途中のフォート・ウィリアムで

も一泊することをお勧めしよう。なお、映画『ハリー・ポッター』シリーズの hogwarts・エクスプレスが走る場面はウェスト・ハイランド・ラインで撮影されている。



ハイランド地方地図

話は唐突に変わるが、ワーズワース (William Wordsworth 1770~1850) の詩の中で最も広く知られているのはおそらく「虹」であろう。日本でも高校の英語教科書の扉や埋め草によく掲載されているので、「見たことがある」人も多いと思われる。だがこういう箇所を丁寧に教える教師は少ないであろうから、実際に一字一句「読んだことがある」人は (英文科出身者や余程の英詩愛好家以外) あまりいないかも知れない。ワーズワースはこの詩にタイトルを付けていないので、「虹」ではなく冒頭の詩句を取って「我が心は躍る」と呼ばれることもある。

この詩の一行目は「我が心は躍る、空に虹の架かるを見ると (My heart leaps up when I behold a rainbow in the sky:)」と始まり、二行目以下「我が命の始まりにさなりき (So was it when my life began:);」「我いま大人にしてさあり (So it is now I am a man:);」「我いずれ年老いてもさあれ (So be it when I shall grow old,)」と続く (岩波文庫版の田部重治訳を一部改訂して引用)。いや、本当はこのように文語的に訳すのは邪道なのかも知れない。ワーズワースはごく日常的な言

葉を使って人間の自然な感情を表現したのだから。そのことを加味して普通に訳すと、「私の心は躍る、空に虹が架かるのを見ると」、「私が幼い頃はそうだった」、「私はいま大人だが、やはりそうだ」、「私が年を取ったのちも、そうであってくれ」ということになる。そしてこの後五行目は「そうでなければいっそ死なせてくれ (Or let me die!)」と続く。虹を見て心が躍らなくなってしまったような人間は、この詩人に言わせれば、死んだ方がましだということになるのかも知れない。

さて、私がインヴァーネスから日帰りでカイル・ラインを往復したときのこと、復路の列車は座席がほぼ埋まる程度に混み合っていた。隣にはシカゴから来たという米国人旅行者、向かいにはスコットランド人の中年夫婦が座っていた。私も米国人も美しい車窓風景に目を奪われていたのだが、スコットランド人はこんな風景などひとつも珍しくないのか二人それぞれに新聞やペーパーバックを読み耽っている。窓の外では例によって雨が降ったり止んだりしていた。渓谷を抜けて風景が開けた頃、雨が止んで陽が射して来た。その瞬間、空に虹が美しい半円を描いているのに気付き、私はカメラを取り出して窓から撮影し始めた。隣のアメリカ人も虹に見とれている。ところが、向かいのスコットランド人夫婦の旦那の方が、一体何事かと私に訊いて来た。彼らは後ろ向きに座っていたので、そちら側からは虹が見えなかったのである。私が「虹だよ。美しいではないか」と付加疑問文で言うと彼は、こんなものはいつも見ているから珍しくないさ、というようなことを呟いて、窓の外には興味を示さず読んでいた新聞に視線を戻してしまった。それで、私は危うく言いそうになった。「あんた、死んだ方がましだよ。いや、俺がそう思ってるということじゃなくて、ワーズワースって人がそう言ってるんだけどね」と。

昔から虹は七色で構成されていることになっている。見たところそのようには見えないが、科学的にはそういうことになっているのだ。この七色の順序を覚えるための便利なセンテンスがある。それは、'Richard of York goes battling in vain.' (ヨーク家のリチャードは戦争に赴き、失敗に終る。) というものである。この文を構成する七つの単語の頭文字に注目して欲しい。'Richard' の

‘R’は‘red’つまり「赤」、同様に‘o’は‘orange’「橙」、‘Y’は‘yellow’「黄」、‘g’は‘green’「緑」、‘b’は‘blue’「青」、‘i’は‘indigo’「藍」、そして‘v’が‘violet’「紫」である。米国を初めとしていくつかの国では虹を六色と考えているらしいが（藍と紫をひとつに数えているのであろう）、七という数字にはまとまりの良さや縁起の良さが付随することを考えれば（世界七不思議とかラッキー・セヴンとか）、ここはやはり七色でなければならない。

実は、この‘Richard of York goes battling in vain.’というのは実話なのである。中世のイングランドの、薔薇戦争（the War of the Roses）の頃の話だ。この戦争は1455年から1485年まで続いたイングランドの王位継承権を巡るヨーク家とランカスター家の争いで、薔薇戦争などというロマンチックな名称はヨーク家の紋章が白い薔薇、ランカスター家のそれが赤い薔薇だったことに由来する。

ランカスター王朝は1399年にヘンリー4世が即位した時に始まった。先代のリチャード2世（プランタジネット家）は増税や浪費癖（王冠を質入したこともあったらしい）で評判が悪かったため諸侯の反乱によって退位させられ、獄中で餓死したという。どうでもいい話だが、ハンカチを発明したのはこのリチャード2世だったらしい。一方ヘンリー4世はリトアニア遠征の際に罹患した伝染病が原因で、即位後わずか十余年で死んでしまう。そして今だ年若い放蕩息子のハル王子が更生してヘンリー5世として即位し、長年に亘る敵国のフランスに遠征してアザンクール（英語読みはアジンコート）の戦いで勝利を収めた。美男だが冷酷で残忍な野心家だったと伝えられるこのヘンリーは、アザンクールでの勝利の二年後にパリ郊外でやはり伝染病のために急逝する。後継者は同じ名前を持つ生後八ヶ月の息子だった。この三代に亘るランカスター家のヘンリー王の治世とその周辺の間人間関係のことは、シェイクスピア（William Shakespeare 1564～1616）がこの三人の王の名前をタイトルに冠した歴史劇に詳細に描いている。

結果的に百年以上続いたフランスとの「百年戦争」はこの頃、ジャンヌ・ダルクの活躍もあって

イングランド側が劣勢になり始めた。成人したヘンリー6世は精神に障害を来し、ヨーク公リチャードと王妃マーガレットが実質的な政権を掌握していた。マーガレットは百年戦争終結を意図してフランスから政略的に嫁いで来た王妃で「赤い薔薇の王妃」の異名を取るが、やがてヨーク公リチャードとの確執が深刻化して行く。百年戦争の敗戦によってヘンリー6世が国民の支持を失い始めたのに乗じてヨーク公リチャードは自らの王位継承権を主張して反乱を起こした。1455年5月のセント・オールバンズの戦い、1459年9月のブロア・ヒースの戦い、1460年12月のウェイクフィールドの戦いなど、度重なる合戦の末にこの最後の戦いでリチャードは戦死した。「ヨーク家のリチャードは戦争に赴き、失敗に終わった」のである。死んだリチャードの首は紙の王冠を被せられ、ヨークの街の城門の前に晒されたという。



薔薇戦争関係地図

ウェイクフィールドの戦いでリチャードは戦死したが、戦いそれ自体は最終的にヨーク家の勝利に終わった。こうしてリチャードの息子エドワードが1461年11月にエドワード4世として即位してヨーク王朝が始まり、ヘンリー6世はロンドン塔に投獄される。だがこのときエドワード（すなわちヨーク家）の有力な支援者だったウォリック伯リチャード

ドが1470年10月にランカスター側に寝返り、エドワードを追放してヘンリー6世を復位させた。エドワードは弟リチャード（のちのリチャード3世）を引き連れて反撃に出て、半年後の1471年4月に復位し、ヘンリーをロンドン塔に幽閉したのちに処刑した。

エドワード4世の死後、1483年4月に長男エドワード（当時12歳）がエドワード5世として即位するが、戴冠式を挙げるより早く退位させられ、ロンドン塔に幽閉された——このエドワードのその後の消息は不明であり、のちの時代にエドワードのものらしき遺骨がロンドン塔で発見されたが、確認はされていない。これはエドワード5世の叔父にあたる前述のリチャードが、兄エドワード4世の王妃エリザベスと対立したため、甥であるエドワード5世を1483年6月（即位してわずか二ヵ月後）に追放して自らがリチャード3世として即位したということである。シェイクスピアの歴史劇『リチャード3世』でもこのリチャードは、屈折した劣等感に突き動かされる狡猾で残忍な悪役として描かれている。（一方で『ヘンリー6世』においてヘンリー6世は、父ヘンリー5世やこのリチャード3世のような野心など微塵も持たない、控え目で敬虔な賢者に描かれている。）

悪人リチャード3世の天下も長くは続かなかった。1485年にランカスター家の流れを汲むヘンリー・テューダーが反乱を起こし、このボズワースの戦いに軍を率いて自ら出向いて行ったリチャードは落馬の末に戦死した。再び「ヨーク家のリチャードは戦争に赴き、失敗に終わった」のである。こうしてヘンリー7世が即位したことでヨーク王朝は終焉を迎え、その後120年近く続くテューダー王朝が始まった。このヘンリーはヨーク家のエリザベスを王妃に迎えることでランカスター派とヨーク派の和解を実現し、こうして三十年に亘る薔薇戦争は幕を降ろしたのだった。なお、リチャード3世は戦死した国王としては1066年にヘイスティングズの戦いで倒れたハロルド王（ノルマン軍が放った矢が目に刺さって死んだらしい）に続いて二人目であり、その後現在に至るまで「最後の」戦死した王である。

D.H.ロレンスの作品における動物の描写について (その2)

経営学部

山田 晶子

【兎】

前号ではきつねと馬について考察したので、今回は兎について考察をしようと思う。

D.H.ロレンスの作品に登場する動物のうちで、兎もかなり重要な動物であり、それが描かれている有名な作品がいくつかある。

まず、ロレンスの最高傑作と認められている『恋する女たち』(Women in Love 1920) の第18章「兎」を見てみよう。この章は主人公の1人であるグッドルーンという女性とジェラルドという男性が互いの関係を深める上で、登場する兎が大きな役割を働いている。

グッドルーンは、アーシュラの妹であり動物の彫刻を作ることを仕事とする芸術家である。彼女はショートランズという中・上流階級の館に、その娘であるウィニフレッド（小学生と思われる）の家庭教師に雇われてやってくる。ショートランズにはウィニフレッドの兄であるジェラルドがいる。彼は父親の後を継いで炭坑経営者になる男である。グッドルーンとジェラルドは、互いに相手が自分にとって重要な存在つまり恋人になるであろうと予感している。まだこの章では2人は深い関係まで進んでいないが、すでに接吻を交わしたことがあった。

さて、兎が2人の関係を進める上でどのように関わっているのであろうか。グッドルーンは、ウィニフレッドに絵を描かせるが、最初はルールーという名前の彼女の飼犬をモデルとして描かせた。この犬はすっかり人間に飼われなくなってしまっている哀れな老いた犬として登場しており、作者はこのような犬の存在を惨めなものとして描いてい